

サウジアラビア留学生の日本留学最終年における 人的ネットワークの形成

——留学1年目との比較を通じた追跡事例調査——

田口香奈恵

1. 調査目的

本稿は、田口（2014）の追跡調査としてまとめたものである。田口（2014）では、来日前の日本語学習歴がない4人のサウジアラビア留学生を対象に、彼らの来日1年目の人的ネットワークがどのように形成され変容したかについて調査した。その結果、来日1年目は日本語予備教育期間中のため日本語学習を中心としたネットワークが形成されており、その変容要因は、接触場面の参加者との関わり方で異なっていることが明らかになった。ネットワークの形成・維持には、人間関係維持や日本語学習だけではなく、学校生活や日常生活を円滑に遂行させる機能を追求することも重要であった。また、学内外を問わない新旧のネットワークを駆使した積極的な態度が促進要因であることも提示された。一方で、ネットワークを阻害する要因としては、留学生の日本人に対する否定的評価、対人関係形成が困難な要因を自分ではなく相手に負わせている点、相手との認識のずれ、挫折による諦めの態度が挙げられる。

本調査では、学部編入した4人の留学生の対人関係のネットワークが、留学3年目である留学最終年にどのように変化したかを調べ、留学1年目と比較しながら、特に日本人との友人関係を中心に促進要因と阻害要因を探っていく。

2. 先行研究

本調査の対象者は全員イスラム圏からのムスリム留学生である。中野ほか（2015a）では、独特な価値観や行動様式を持っているムスリム留学生が、「社会生活上の困難」を抱えながら日本での生活を送っていることを明らかにしている。さらに、中野ほか（2015b）は、在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究動向についてまとめている。その中で、研究対象となったムスリム回答者の7割以上が日本人との付き合いについて満足しているという結果に対し、日本人側にはムスリムやイスラム教に対して消極的でネガティブなイメージが散見されたと述べている。そして、これらの研究が「日本人側とムスリム側の双方で、付き合いや適応に対する期待度が異なる可能性、あるいはお互いが適応や対人関係に求める基準に違いがある可

能性を示唆（p.157）」していると述べている。

留学生に対する日本人側の消極的な態度は、留学生の背景への関心欠如だけでなく、自己開示の領域¹⁾（横田1991）や偏見（小松2013）、情報環境（李2015）など様々な要因が影響していると考えられている。

また、ムスリム留学生に限らず、留学生と日本人学生の友人関係構築には困難が伴うという結果が報告されている。中国人留学生の友人ネットワークを調査した李（2015）は、調査対象の中国人留学生の多くが日本人との人間関係に不快感や失望を持ち、「ヨソ者」として扱われていることで距離感を感じていると述べている。そして、中国人留学生が日本での生活経験から、日本人が「同質性」や「同調行動」を好むことを発見し進んで同調しながらも、そこに抵抗を感じるものが少なくなかったことを報告している。

同様に中国人女子留学生を対象とした小松（2013）の研究では、インタビュー内容から「友人形成への関心」「友人関係期待」「友人関係に関する否定的体験」「否定的体験に対する行動」「友人関係に関する肯定的体験」の5つのカテゴリーを見出し、友人形成の過程を明らかにしている。その中で、否定的経験の受け止め方とその後の行動が、友人形成の成否に影響していると述べている。この点は、田口（2014）で留学生が「挫折による諦めの態度」により対人関係不形成に至った結果と重なる。さらに、小松（2013）は、留学生の友人形成のためには、留学生自身の困難を乗り越える粘り強さと、大学側の制度的支援が重要であると指摘している。

一方で、日本人学生と留学生がどの程度親密な関係を築くに至るかを報告した事例もある。花見（2010）は、日本人学生と留学生との対等な関係を構築する過程を明らかにしている。交流を通して、来日時「日本人学生＝生活支援者、留学生＝被支援者」という構図が逆転したり、それを越えた関係が見られたりした時、日本人学生は「留学生との立場の違いがなくなった」と感じていた。これは、一人の日本人学生の意見ではあるが、日本人側の消極的な態度を打開する一つの指標として示唆される。

3. 調査概要

3.1 調査対象者

調査対象者は、サウジアラビア留学生4名（男性）で、3年半の特別プログラム²⁾第1期生である。彼らは2012年9月に来日し、1年半の日本語予備教育を受けた後、2014年4月に大学学部（理工系）3年次に編入し、2016年3月に卒業、帰国した。なお、日本語予備教育終了時の在籍クラスは初中級レベルだった³⁾。

3.2 方法

今回の追跡調査でも留学1年目の調査（田口2014）同様、ネットワークマップ⁴⁾を用いたインタビューを2回行った⁵⁾。ネットワークマップとは、日本語教育のアクティビティ教材⁶⁾に紹介されていた「私のネットワーク」を参考にしたものである。「私」を用紙の中心に置

き、「日常つながりのある人やものと自分との関係を図式化（中村ほか2005）」するもので、「いろいろな人が自分のまわりにいて、さまざまな形で自分を支えてくれること」がわかる。中村ほか（2005）によると、学習者の日本語学習動機を高める人たちの存在を知ることができる方法であると述べている。

1回目のインタビューは、大学4年生の新学期直後（2015年4月23日～30日）に、2回目は約1年後の卒業を控えた時期（2016年3月11日～25日）に実施した。インタビューは全て日本語で行い、録音し文字化した。1回目のインタビューでは、ネットワークマップを描き、それを見ながら補足説明をしてもらった。2回目は自分が1回目に描いたネットワークマップに変化があったか、それはどのような変化かを説明してもらった。また、3年半の留学生活に対する感想、後輩留学生へのアドバイス、日本人の友達作りには何が大切だと思うかについても質問した。

4. 結果と考察

ここでは、4人の留学生が描いたネットワークマップの内容がどのようなものだったかについて量的・質的側面から分析し、考察を加える。

4.1 ネットワークの分類

表1では、阿曾村ほか（2002）の分類に倣い、留学生4名のネットワークの分類を試みた。田口（2014）でも阿曾村らの分類に従い分析を行ったため、今回もそれに基づく。本調査での2回分のインタビューに登場した参加者を全て記載する。表中の二重下線部は2回目のインタビューでネットワークが新たに追加されたもの、（ ）はネットワークが消滅したものである。網がけは留学生がベストフレンドだと答えた人物が含まれている。★印は留学1年目を調査した田口（2014）には存在しなかった新規のネットワークである。✓印がある参加者は、田口（2014）で登場したが今回の調査では消滅していたものである。

4人の留学生に共通する点は2つある。一つは、同国人同士のネットワークが、学内外を問わず留学当初から変わらず維持されていることである。もう一点は、日本語予備教育を受けていた留学1年目のネットワークと比べ、日本語ボランティアや日本語の先生など日本語学習に関するネットワークが消滅し、留学3年目にあたる学部4年生では、個人差はあるが、留学生が所属する学部学科に係るネットワークへと変化したことである。日本人チューターや卒業研究の指導教官とは、学習機能を中心としたネットワークが形成されている⁷⁾。しかしこれらは、大学の教育的制度上にあるいわば不可避なネットワークであるため、接触場面の参加者として予測可能なネットワークであるとも言える。

一方で、留学生が自力で開拓していったと考えられる「日本人の友達」という新たな参加者が4人中3人に見られた。前回の日本語予備教育期間中の調査（田口2014）では、日本人学生は「授業のボランティア」や「ボランティアチューター」という立場で登場し、留学生にとって「友達」という認識は見られなかった。しかし、今回の調査ではネットワークマップに「日

表1 ネットワークの分類

・ネットワークの種類（恒常的ネットワーク◎／散発的ネットワーク○／ネットワーク△）
 ・機能（人間関係維持機能♥／学習機能◆／学校生活遂行機能♣／日常生活遂行機能♠）

	接触場面の参加者	留学生A	留学生B	留学生C	留学生D
学内	同国人の友達・先輩	◎／♥	◎／♥	◎／♥	◎／♥
	★日本人チューター	◎→○／◆	◎→○／♥◆	(◎／◆)	◎→◎／♥◆
	★卒業研究の指導教官		◎／◆	◎／♥◆	◎／◆
	★日本人の友達	◎／♥◆	◎／♥◆	◎／♥◆	
	★同学部（専門授業）の先生		◎／◆		
	★同研究室の先輩				○／◆
	★違う研究室の先輩			○／◆	
	アラビア語で話す先生 ⁸⁾				○→△／◆♣
消滅	日本語ボランティアチューター	✓	✓		✓
	日本語の先生	✓	✓	✓	
	日本語のクラスメート		✓	✓	
	日本語授業のボランティア			✓	
学外	同国人の先輩（卒業生H）	◎／♥	◎／♥◆♣	◎／♥	◎／♥
	日本人の友達（卒業生Y）	(○／♥)	○／♥		
	本プログラムの受け入れ機関		○／♣		△／♠
	国の家族			◎／♥	
	ホームステイ先の家族	○／♥♠			
	日本語の旧クラスメート（卒業生F）	◎→○／♥			◎／♥
	★日本人の友達			◎／♥	
	★海外留学先で出会った友達	○／♥			
消滅	日本人の友達（Tさん）	✓			
	近所の人			✓	

本人の友達」という新たなカテゴリーができ、そこに一人もしくは複数の日本人名が書かれていた。「日本人の友達」との出会い、授業や研究室、日本人学生の紹介が多く、中には学外のカフェで声をかけたら偶然にも同大学の学生だったというケースもあった。留学生AとCは、「日本人の友達」の中にベストフレンドがいると答えている。この二人は、学外でも「日本人の友達」「海外留学先で出会った友達」という新規の「友達」ネットワークを形成している。

「日本人の友達」の中にベストフレンドができた留学生AとCに対し、留学生BとDは限定的なネットワークとなっている。両者は前回の調査（田口2014）でも、ネットワークが縮小傾向にあった。留学生Bの「日本人の友達」は一人のみで、研究を通して知り合った同学年の日本人学生である。頻繁に家に誘っているが、ベストフレンドではないと答えている。

留学生Dのネットワークは、他の3人と比べて最も狭く、ネットワークマップにはアラビア語を話す人物しかかかれていなかった。インタビューのやり取りの中で、表1に記載した指導教官や日本人チューターなどが登場したが、留学生Dにとって短時間に思い浮かべることができたネットワークは、ネットワークマップにかいたようなアラビア語を話す人物のみだったということになる。留学生Dは、週に1回会っていた日本人チューターをベストフレンドだと答えているが、一方では「友達はいません、できない」とも答えている。

4.2 対人関係の変容要因

ここでは、4人のネットワークの変容について、促進要因と阻害要因の面から質的に分析・考察を加えたい。ネットワークの中でも特に日本人との関わり方を中心に見ていく。

4.2.1 促進要因

日本人の友達の中にベストフレンドがいると答えた留学生AとCのネットワーク形成・維持に注目したい。

留学生Aは、留学1年目の3ヶ月にわたる調査期間中にも学内外、国籍を問わず様々な人物と交流しネットワークを広げていた。つまり、留学1年目から積極的に対人関係構築に努めており、その姿勢は日本語予備教育期間が終了し、学部編入後も継続されていたと考えられる。同国人以外のネットワークの中で最長のネットワークは、留学1年目に訪れたホームステイの家族で、ホームステイをした2年後も関係が維持されていた。多いときは週1回、少ないときでも2ヶ月に1回程度の頻度でホームステイ家族と接触しており、食事をしたり、生活相談をしたりしていた。卒業式にも出席してもらう予定だと話している。

ベストフレンドの日本人学生との関係は、本調査の1年間に変化している。1回目のインタビュー（2015年4月30日）では、出会いのきっかけが授業だったこともあり「日本語のチェックを少しだけ」してもらったり勉強の話をしたりしているが、以下に挙げる2回目のインタビューにあるように、勉強のためでなく遊び仲間として会っている。つまり、履修授業終了後は「人間関係維持」を目的とした接触に変化している。サウジアラビアの友人間で見られる間柄のように互いに相談したり冗談を言ったりできるという語りからも、友人形成が成功していることがわかる。

【留学生A：2回目（2016年3月18日）インタビュー】

「今は、Oさんだけ話す。（中略）去年、土木で同じ授業をとった。今年は研究だけ。暇な時、友達が集まる時、ご飯食べたり、ゲームする。よく会っていた。勉強じゃない。一緒に遊ぶだけ。」

「（筆者：帰国後も友達関係が続くといいですね。）ホームステイとOは、（関係が続くと）思う。Oはサウジアラビアに行きたいけど、ビザをとるのが難しい。でも、ドバイでできます。日本のベストフレンドはOさん、一人だけ。相談したとき、本当にサウジアラビアみたい。冗談が言える。ゲームもする。」

留学生CもAほどではないが、留学1年目から人間関係維持を目的としたネットワークを形成していた。しかし、日本語予備教育時代は、次のインタビューの下線部でも見られるように、自分の日本語に自信がなかったため、友人形成を躊躇する様子が窺える。大学に編入学したことで、学内外で積極的に意識的に友人形成を行っており、現在のネットワークに満足していた。

【留学生 C：1 回目（2015 年 4 月 23 日）インタビュー】

「(学外の) スターバックスで同じテーブルに座っていた人に話しかけた。『こんにちは』日本人は無理。サウジアラビア人はできる。(中略) 自分から声をかける。時々向こうから『お国はどちらですか』話す。電話番号、LINE で連絡する。遊びにきてもらう。レストランで会ったり、いろいろな場所で(会う)。この週末も新しい人と約束している。新しい友達を見つけた。古い友達も。私の家でアラビアの食べ物を作って、ゲームをする。

大学に入りましたから、たくさん友達作りました。(日本語予備教育時代の) 別科と全然違う。私の日本語はちょっと下手ですから、別科で日本人の友達ないです。大学入ってから、たくさん友達、作りました。お互いに連絡をしあう。勉強、映画、サッカーの試合、妻のこと、楽しい。別科の時より、全然楽しい。今のほうがいい。」

留学生 C は、1 回目のインタビューから約 1 年後の 2 回目のインタビューでも、学内外で積極的に友人形成を行っていた。また、日本人のベストフレンドとの関係について質問したところ、以下のように答えている。自宅が近いため頻繁に会い、留学生 A と同様に互いにアドバイスをし合っていた。

【留学生 C：2 回目（2016 年 3 月 11 日）インタビュー】

「(ベストフレンドは) います。同大学の学生。違う学科。日本人の友達から(紹介してもらった)。たくさん手伝います。いつも私の家に来ます。友達の家は(私の家に) 近い。友達からアドバイスをもらいます。私もアドバイスをあげます。いろいろなことをやります。(中略) 他の友達も面白い。でも、これは日本人のベストフレンド。」

花見(2010)は、個々人の親密化の進展は、「二人の頻繁な時間の共有を土台として、互いの自己開示の度合いが大切な要素である (p.61)」と述べている。本調査でも留学生が日本人の友達と頻繁に会い、互いの立場が対等になったことでベストフレンドと認識できる関係に至ったことが見てとれる。

さらに、他の留学生へのアドバイスとして、留学生が日本人の友達を作る際に大切なことを留学生 C に尋ねると、以下の下線部のように、日本人とすぐ友達になることは難しく、自分自身の努力が重要であると述べている。この点は小松(2013)の「友人形成への関心」や留学生自身の困難を乗り越える粘り強さが重要であるという指摘と重なる。

【留学生 C：2 回目（2016 年 3 月 11 日）インタビュー】

「日本人は本当に恥ずかしいです。すぐ会えます。これは無理。自分で頑張ってください。日本人とたくさん会って、一緒にレストランへ行行って、カフェへ行行って、『すみません、日本語で手伝ってください、教えてください』それでそのこと、だんだんだんだんと、あなたの家に。私はどうやって友達を作りましたか。私の家にたくさんたくさん(招待した)一緒に。来てください。私は料理を作ります、カプサの。カプサを食べたあとで本当に(仲良くな

れる)。なんでカブサはおいしかった。カブサもう一回、カブサもう一回。そのあとで一緒に遊びます。」

以上のように、留学生 A と C に共通して観察された友人形成に至った要因は、接触頻度が高いこと、留学生自身のネットワーク形成への意識が高く、実際に努力していることである。そして、彼らにとって日本人のベストフレンドとは、互いにアドバイスし冗談が言い合えるような、相手との立場が対等であることが明らかになった。

留学 1 年目の調査（田口 2014）では、生活面と日本語学習面の両方を充足させるために、ネットワーク形成を行っている様子が見られたが、留学 3 年目ではその目的は友人形成のきっかけとして用いられるが、友人関係を維持する目的としては語られていなかった。それよりもより深い人間関係を構築しようと努力する過程が見られた。

4.2.2 阻害要因

次に、ネットワークを阻害する要因について考察していく。インタビューの内容から次の 2 点の要因が観察された。一点は、4 人の留学生に共通してみられた日本人に対するネガティブな評価である。もう一点は、留学生 D のネットワーク縮小に影響を与えた個人的な要因である。

1) 日本人に対するネガティブな評価

まず、4 人の留学生全員が感じていた日本人の態度についてまとめたい。留学生 A ～ D は、日本人は「優しい」が、サウジアラビア人に比べて「シャイ」で「フレンドリーではない」と言っている。「優しい」は「親切」の意味で使われていた。「親切」とは、例えば「何か日本語でわからないことがあった時、手伝ってほしいと頼むと教えてくれる（留学生 C）」「道でぶつかったらすぐに謝る（留学生 C）」「道がわからないとき手伝ってくれる（留学生 B）」などである。

インタビューの中で留学生は、サウジアラビア人は一度会って話せばすぐに仲良くなれる、金曜日の礼拝後に誰とでも一緒に食事に行ける「フレンドリーさ」があると語っている。つまり、サウジアラビア留学生にとって友人形成とは、相手を選ばず努力を必要としない気軽に行えるごく自然なことであると捉えられる。

しかし、日本ではその態度は受容されず、日本人からフレンドリーではなくむしろ冷たい態度を取られており、戸惑い驚いている様子が見られる。田口（2014）では留学生 B と D が自らの経験から、日本人に対して否定的な評価をしていたが、本調査では 4 人全員が日本人の消極的態度を経験しインタビューの中で語っていた。それは、「日本人を食事に誘っても、予定がなさそうなのにいつも断られる（留学生 B）」「海外留学先で仲良くなった日本人学生に日本で会ったら、別人のように冷たかったのとても驚いた（留学生 A）」「日本人に挨拶などの声をかけても消極的な態度を取られ、それ以上の会話が續かない（留学生 D）」「旅行先の大阪では知らない人とでもすぐ打ち解けられたが、東京ではその反対だった（留学生 C）」などの経

験である。日本語予備教育期間の留学1年目に比べ、学部編入後は日本人と接触する機会が増えたことが考えられる。そのため、上記のような日本人側の消極的態度を目の当たりにし、それを認識する頻度も増えた可能性がある。

田口（2014）では、阻害要因の一つに「日本人は社交的ではなく閉鎖的だ」という留学生による否定的評価を挙げたが、本調査でも留学生の様々な経験を通して、彼らの日本人に対する認識を再確認する結果となった。また、留学生に対する日本人側の消極的な態度も明らかになった。これらの点は、中野ほか（2015b）が指摘しているように、日本人側とムスリム側の対人関係に求める基準に違いがある可能性を支持する結果となった。

留学生Bからは、「シャイであることが日本文化そのもの」「自分は学部1年生ではなく3年生に編入したため、日本人の間で既にグループができてしまっており、そこに入りにくかった」という意見もあった。一見客観的とも捉えられる意見だが、それらを理由とし、それ以上の人間関係を形成しようとししない留学生B自身の消極的な態度とも捉えられる。これは田口（2014）でも観察された点である。この点は、日本人の消極的な態度を認識しながらも、それを受容しベストフレンドと呼べる友人形成に至った留学生AとCの差であるとも考えられる。

2) ネットワーク形成を諦めさせる個人的な要因

留学中にネットワークが徐々に縮小し、遂には拡大することがなかった留学生Dについて考察する。「3.1 ネットワークの分類」でも述べたが、留学生Dのネットワークは、他の3人と比べて最も狭く、図1左のようにネットワークマップには同国人もしくはアラビア語を話す教員の名前しか現れていない。

インタビューでのやり取りを通して、ようやく指導教官や日本人チューターなどが登場したが、留学生Dが短時間に思い浮かべることができたネットワークは、アラビア語を話す人物のみだったということになる。留学生Dは、週に1回会っていた日本人チューターをベストフレンドだと答えている。授業でわからないことを尋ねたり相談したりしている。そして、

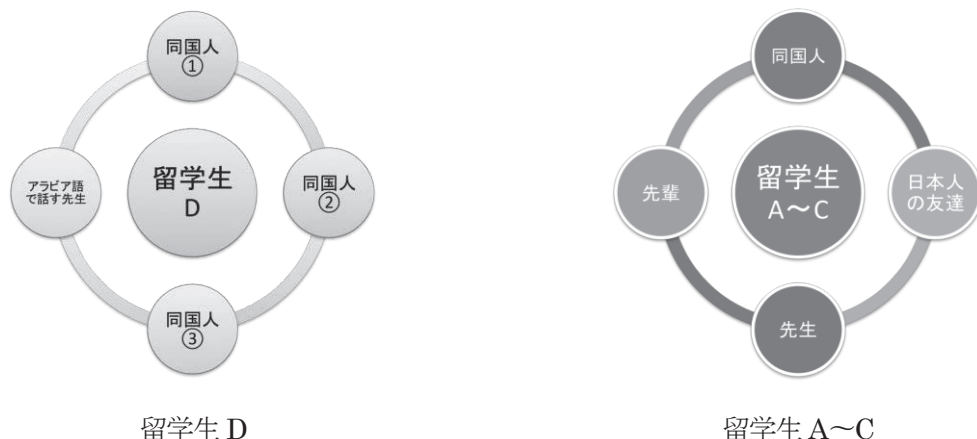


図1 ネットワークマップに描かれた留学生のネットワークイメージ

卒業間近の春休みに、この日本人チューターを初めて自宅に招待している。しかし、一方では「友達はいません、できない」とも答えている。留学生 D にとって、日本人チューターは、留学生 A や C にとっての対等の立場であるベストフレンドとは異なる存在だった可能性が窺える。

留学生 D は田口（2014）で、ネットワーク形成のために学外の面識のない日本人に積極的に関わろうと試みたが、否定的な態度を取られ続け、諦めていた。それでもホームステイなどの新たなネットワーク形成に関心を持ち意欲的な姿勢を見せていた。

しかし、本調査 1 回目のインタビューでは、以下のインタビュー内容に見られるように、友人形成への関心はあるもののそれは無理だと完全に諦めている。留学生 D は、学部編入後も友人形成を試みたが、日本人学生に否定的な態度を取られ、友人形成に至らなかった経験をしていた。

【留学生 D：1 回目（2015 年 4 月 27 日）インタビュー要旨】

日本人の友達ほしいが、できないと思う。日本人は close する。サウジ留学生と日本人の間には距離がある。日本人の授業で「おはよう」と声をかけても、挨拶をしない。日本人教員やチューターとは話すが、同じ学科の日本人学生とは会話がなない。英語は話せないから日本語でと言っても、日本人は話さない。（留学最終学年の 4 年生では）英語と専門の勉強だけ頑張りたい。日本での生活は楽しくない。つまらないので早く帰りたい。日本人の友達はどうできない、諦めた。

2 回目のインタビュー（2016 年 3 月 15 日）でも対人関係形成に対する消極的な態度は変化せず、「4 年生では日本語をほとんど使わず、日本人と日本語で話さなかった」「日本語は飛んだ、忘れた」と日本語の使用が減少し、「今（春休み）、ゲーム、カフェ、ゲーム、カフェ（の毎日）で日本人はあまり会わない」と行動範囲が縮小している様子が語られていた。そして、留学生生活を振り返り、「日本語予備教育時代は、毎日勉強で体がとても疲れた。学部では頭と心が大変だった。心配がたくさんあった」とコメントしている。

留学生 D の留学生生活が大変だった理由については、留学生 C 自身の 2 回目のインタビューの中で以下のように述べている。

【留学生 C の留学生 D に対するコメント（2016 年 3 月 11 日）】

「留学生 D は面白い友達。いちばん優しい友達。時々厳しいけれど、心はきれいな人。留学生 D にとって、日本留学は大変だった。日本にいる間に、お父さんが亡くなった。大学に入る前の専門と学部での専門は異なっていたため、勉強は他の留学生よりも難しかった。だから帰国したいと思っていた。みんなで留学生 D をサポートし、留学生 D も努力した。彼はずっと我慢して頑張っていた。」

以上のように、留学生 D がネットワーク形成を諦めた要因は、日本人側の否定的態度によ

るものだけではないことがわかる。諦めの態度から日本語を使う機会が減少し行動範囲が狭まることで、帰国への思いが増すという負の連鎖が起こっていた可能性が窺える。さらに、国での専門と日本での専門が異なるという心理的負担、父親を亡くした傷心が重なったことも影響していると考えられる。つまり、留学生自身の友人形成への関心や消極的な態度とは別の間接的な要因が存在し、それが消極的態度に起因し、対人関係構築を阻害している可能性が示唆された。

5. まとめ

本稿では、田口（2014）の追跡調査として、学部編入した4人のサウジアラビア留学生の人的ネットワークについて、留学1年目と比較しながら、特に日本人との友人関係について促進要因と阻害要因を考察した。

その結果、人的ネットワークの変容要因の中でも友人形成については、留学生の認識の差が影響していることが明らかになった。接触頻度が高いこと、留学生自身のネットワーク形成への意識が高く、実際に努力している場合は、友人形成に至っている。そして、彼らにとって日本人のベストフレンドとは、お互いにアドバイスし合い冗談が言い合えるような、相手との立場が対等であることが明らかになった。一方で、田口（2014）では、阻害要因の一つに日本人は閉鎖的だという留学生側の否定的評価を挙げたが、本調査でも留学生の様々な経験を通して、彼らの日本人に対する認識を再確認する結果となった。また、留学生に対する日本人側の消極的な態度も明らかになった。さらに、ネットワーク形成を阻害する要因は、人間形成に直接的なものだけでなく留学生自身が抱える個人的な問題が、間接的に関わっている可能性も示唆された。

今回の調査では、調査対象の留学生のネットワークに登場した日本人学生が、留学生との関係をどう感じていたかについては調査していない。しかし、本調査の結果を異文化理解の授業で紹介したところ、ある日本人学生から以下のような意見・感想があった。

【授業における日本人学生の意見・感想（2016年7月5日）】

「日本人はフレンドリーではないという気持ちは理解できる。ただ、私はサウジアラビア人は少ししつこすぎると思う。日本人の距離のとり方がちがうことが原因だと思う。彼らは日本人はシャイでフレンドリーではないことをあらためて認識し、日本人との距離のとり方を考え、日本人はサウジアラビア人たちは距離が近く、フレンドリーであることを理解するべきだと思う。」

サウジアラビア人と日本人の距離のとり方や対人関係形成の仕方そのものが異なるという指摘は、サウジアラビア留学生の周辺にいた同大学の日本人学生の意見を示唆していると捉えることもできる。一方で、他の国の留学生からは、「日本人と友達になりたくないという留学生がたくさんいる（タイからの留学生）」「日本人の友達を作るのは確かに難しい。でも、頑張れ

ばできないこともない。海外経験がある人は友達になりやすいが、そうでない人は無理と言ってもいい。自分から頑張れば友達になれるけれど、そこまではする必要がないと思う（モンゴルからの留学生）」などの意見があった。留学生側と日本人側の対人関係に求める基準の違いをあらためて確認することとなった。

留学生にとって留学生活は、専門的知識や技術を獲得する学問的な意義だけでなく、異なる文化背景を持つ者同士が交流を通して、新しい価値観や適応能力を身につけ、国境を超えた人間関係を構築する絶好の機会でもある。しかし、ホスト社会の日本人学生とゲスト側の留学生との間には、異文化適応に対して少なからず認識の差がある。今後は、日本人側の、留学生との友人形成への関心や態度・経験などを明らかにし、また、その差を教育的介入によって縮めることはできないか探っていききたい。

注

- 1) 横田(1991)は、「自己開示」を「特定の相手に対して、自分自身の個人的な情報を言葉で伝えること」と定義し、大きく志向的領域(将来、勉強、大学、趣味など)と関係的領域(人間関係、異性関係、心傷など)の2項目に分けている。
- 2) 特別プログラムの詳細は、田口(2014)を参照にされたい。
- 3) 留学生の学部での成績については、把握できていない。しかし、2回目のインタビューの中で、留学生Cは4段階評価(S, A, B, C)ではほとんどSをもらったことを話している。また、留学生Dは、GPAは2.9ポイント台で、学科に所属する学生の中で上位に位置していることを明かしている。
- 4) ネットワークマップの実物は、田口(2014)を参照にされたい。
- 5) 本人の許可を得てインタビューを実施した。
- 6) 中村律子・浅見かおり・金子広幸・宮崎妙子(2005)『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』ASK
- 7) 留学生Aのインタビューには指導教官は登場しなかったが、留学生Dと同じ学科で一緒に卒業研究をしているため、留学生Aにも指導教官は存在していたと思われる。
- 8) 「アラビア語で話す先生」は、田口(2014)では「日本語の先生」の一人として分類している。当時、調査対象の留学生の日本語クラスを担当する教員の一人だったためである。

参考文献

- 阿曾村陽子・阪本史代・加藤好崇(2002)「東海大学学部留学生日本語使用実態調査プロジェクト—中間報告(第2部):東海大学留学生の持つネットワーク—」『東海大学紀要』留学生教育センター22 pp.89-94
- 小松翠(2013)「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12 pp.71-86
- 田口香奈恵(2014)「サウジアラビア留学生の人的ネットワーク形成に関する事例研究」『東海大学紀要』国際教育センター4 pp.105-115
- 中野祥子・奥西有理・田中共子(2015a)「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39 pp.137-151
- 中野祥子・奥西有理・田中共子(2015b)「在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究の動向」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39 pp.153-167
- 横田雅弘(1991)「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105(5) pp.629-

田口香奈恵

647

李文（2015）「中国人留学生の友人ネットワーク」『同志社社会学研究』19 pp.47-63